

位置と環境

出水貝塚は出水市大字上知識字尾崎、尾上善蔵氏の宅地を中心とした、その週辺を含む地域である。高尾野川と平良川に挟まれた洪積扇状地が、米ノ津川の沖積低地に望む扇縁部に位置し、海岸より4kmの地点にある。標高は約21m、低地との比高は5～6mである。台地の周縁には、中下溝が構築され、両側には小堤が築かれ内側は雑木林になっている。

貝塚は尾上氏宅地を中心とする地域が最も広く、その東南50mを隔てる地点に小ブロックが今一つある。鹿児島市の草野貝塚が、台地上を住居地として、周辺の傾斜地に大量の投棄が行われているのに比べると、出水貝塚は、住居地も明確でなく、台地上に極めて少量の堆積がみられるに過ぎない事は、大きな違いである。

調査の経緯

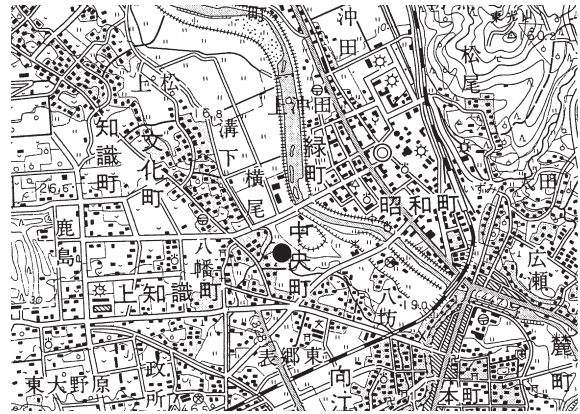
出水貝塚は、1917年（大正6）黒木繁が気付き、3年後（1919年大正9）に荒田道明が、貝塚である事を確認した。山崎五十麿は同年7月および8月に出水貝塚を発掘し、これを考古学雑誌に発表し、且つ長谷部言人・浜田耕作に通報した。両氏は同年（1919年大正9）12月に出水貝塚を発掘した。

1953年（昭和28）林田重幸・河口貞徳は出水貝塚を試掘、人骨の出土により、出水市が企画し山内清男・林田重幸・河口貞徳ほか、1954年（昭和29）に発掘調査をおこなった。

出水市は遺跡確認のために、1996年（平成8）1997年（平成9）1998年（平成10）の三次に渡って岩崎新輔ほかによって出水貝塚の確認調査を行った。

遺構と遺物

山崎五十麿は前述の通り、出水貝塚の第2図1地点の発掘を行っている。尾上卯助宅地北側の畑の用水路よりと、南側の通路内の2地点である。表層約57cm、第2層は貝層70cmで、上部20cmが遺物包含層。最下層は砂礫混在して遺物絶無と述べて、アカホヤ層の認識はなく、洪積層まで掘り込んでいるが、押型文土器は発見していない。この時、人骨も出土



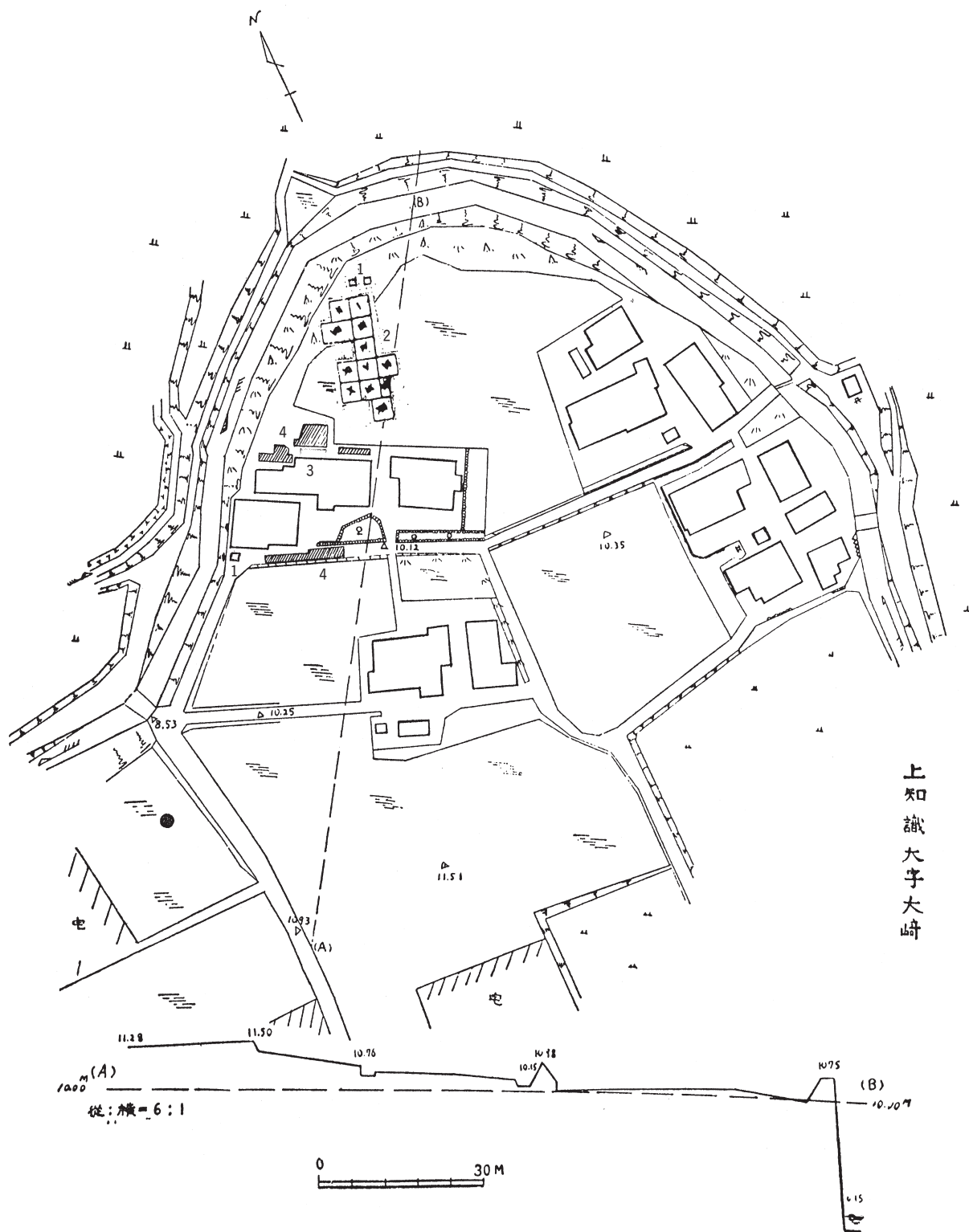
第1図 出水貝塚の位置

しているが、短く破砕されているのを見て、食人の風があったと述べている。

続いて浜田耕作・長谷部言人は山崎の発掘地点に接してその南165m²、第2図2地点を発掘した。この発掘地点のほかに、台地上に26地点を設けて、堅穴を掘り貝層の有無を調べ、貝層の実態を把握している。これによって貝塚は尾上宅地内と、台地東南隅小地点に確認され、貝層の堆積は最大90cm、最小30cm、平均40cmである事が明らかになった。貝層以下については、自然の粘土層に達し、礫石を包含せるは洪積層なるが故として、以下に遺物はないとしている。出土遺物は以後の調査遺物とほとんど変わらないが、図版に押型文土器があり、南九州では押型文土器は縄文時代後期まで残存するとの説が流布する原因となった。

林田・河口は12月20・21日に、尾上家母屋の中央裏に接して、4m²のピットを掘り、断面を整理したところ、貝層の下から頭頂部が現れたので。東に接して4m²拡張して完掘した。貝層の下のアカホヤ層を掘り込んで、仰臥屈葬の人骨が、西向きに埋葬されていた。頭部は土器の底部で覆い、胴部の四辺は長めの石を選んで囲い込んだものである。骨盤に沿って阿高式土器を共伴していた。この遺跡で最も保存状態の良好なものであった（写真1）。

昭和29年には、山内・林田・河口は、尾上宅家屋を挟んで表と裏を99m²、第2図4を発掘した。山内博士は屋根に登って調査を指揮し、『名折れだ！深く掘れ！』と叱咤激励し、調査区をことごとく礫層まで掘り下げた。その結果、アカホヤ層の下



第2図 出水貝塚 1は山崎, 2は京大, 3は林田・河口 4は鹿島の発掘地点を示す

の、洪積層直上に、押型文土器の包含層である黒色土層を発見する事が出来た。本遺跡の縄文中後期の分布より遥かに広い。

押型文土器は山形・楕円形・格子状の三種類があり、山形押型文土器が最も多く、次いで楕円形押方文が多く、格子状押型文土器は少ない。また分布も異にし、山形押型文土器は、母屋北西の第1トレンチに集中し、楕円形押型文土器は母屋東南の第VIIトレンチに出土し、格子状押型文土器は母屋南の通路の第Vトレンチに限られている。しかし後に変容した新しいタイプの押型文土器は共伴する事が、確認調査で明らかになっている。

本遺跡の特徴である埋葬は、28年出土の遺体と同じく、母屋の北西・山形押型文出土地点の上部に当たる第1トレンチで検出された。出土した層位は黒色土層上位と、アカホヤ層上位であるが、いずれも阿高式土器を伴い、縄文中期に属するものである。

一号遺体は、28年出土の遺体より約4m北西の母屋に最も近い位置から出土した。最も深く、押型文土器包含の黒土層まで掘り込まれて南向きに埋葬していたが、阿高式土器を共伴しており、中期と判明した。仰臥し、下肢は折り曲げて立てている。何等の施設も伴っていない。

二号遺体は、一号の東側にならんで、南向きの仰臥伸展葬であるが、1号と異なりアカホヤ層の直上に沢山の石で被覆して埋葬されている。保存状態は不良で、下肢骨を欠いている。

三号は四号を挟んで北側に、頭骨のみである。アカホヤ層の直上にあって、礫群に被覆されている。



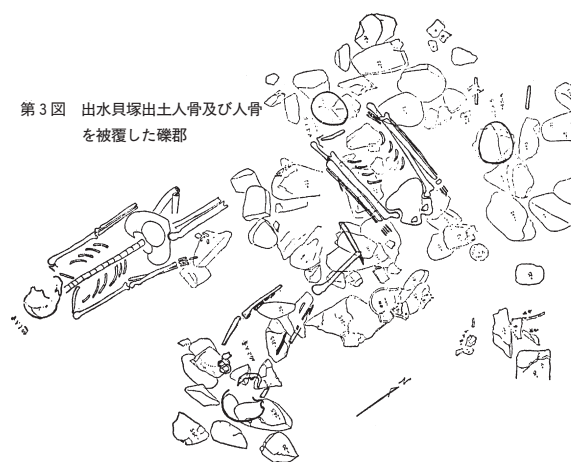
写真1 昭和28年調査遺体

四号遺体は、二号と三号の間に、西向きの仰臥屈葬を完全に行っている。二号三号と同じく礫群で被覆している事は同様である（第3図）。

人骨は確認調査で今一体出土している。22Tから出土したものである。上部は失われて、下肢骨だけである。旧尾上家は改築されて、現在は北へ移築されている。人骨の出土地点は元の倉庫跡で、倉庫の造廃に因って上半身は失われたものであろう。南福寺式土器を共伴しているから、他の5体より一時期後のものである。

長谷部言人博士が経費を総て負担された1919年（大正9）の発掘では、目標の人骨は細片だけしか発見されなかった。尾上家の家屋が埋葬遺構を守ることになったのであろう。総会で発掘の発表をしたが、長谷部言人博士は、前列の真ん中に座られて、発表が終わると『良く分かった』と頷かれた。南九州で、待望の埋葬遺構が、初めて発見されたのである。黒土層まで深く掘込んで埋葬された1号人骨は被覆も、囲いもないが、アカホヤ層に土壌を掘込だ埋葬には石囲いがしてあり、アカホヤ層直上埋葬は礫で密封されていた。死霊封じであろうか。

上層の土器には、アカホヤ層上部と貝層より出土するものとがある。アカホヤ層からは、比較的下層から並木式土器、次に阿高式土器、その上位に南福寺式土器が出土する。貝層からは比較的下層から出水式土器、上層からは市来式土器が出土する。しかしこれらは地点を異にし、出土量は多くない。特記すべきものとしては、瀬戸内・北九州との交流を示すものとして、岡崎K1式土器・鐘崎式土器が出土



第3図 昭和29年調査遺体

トレンチ別 層別	VI	V	Ⅶ	I ¹	I ³	II	III
	表層						
出水貝塚の土器と地層との関係	貝層	出水VI			市来? 出水 阿高	出水(III) 阿高	市来(I) 出水(II III) 南福寺(V)
	赤褐色土層	並木式	南福寺下層	南福寺下層	阿高	阿高	南福寺(I II) 阿高 並木(VI)
	黒色土層	押型文		押型文	押型文		押型文 (I V VI VII)
	砂礫層						

第4図 土器の出土状況

している。

石器は出土が少ないが、石皿が見られないのは、堅果の出土がないのに関係するのであろうか。地球的規模で、4000年～3000年前に冷涼な気候に急変すると言われているが、南九州ではこの時期に照葉樹林気候から落葉広葉樹林気候に急変し、この影響で縄文中期には極端に少なかった遺跡数が、縄文後期に至って、急に増加している。縄文後期初頭の指宿式の遺跡数は140遺跡に急増し、次の時期の市来式の遺跡数は168遺跡に達して最高値を示すに至っている。この時期の出水貝塚の土器出土の状況を比較すると、縄文後期初頭には、指宿式に代わって出水式が出土し、次は同じく市来式が出土するが、遺跡単位の土器出土量は著しく少ないのが目立つ。同時期の貝層の堆積状況を草野貝塚と比較すると、草野貝塚では1.5m～3mに対して、出水貝塚では平均40cmと少ない。捕獲された動物遺体の重量は、草野貝塚は205kg出土しているのに対して、出水貝塚では5,221kgで、出水貝塚出土を3回分3倍としても遠く及ばない。

この時期に重要な食料としては、動物のほかに植物の堅果があげられる。草野貝塚ではイチイガシとコナラが出土しており、調理に使った石皿54、叩石類154が出土しているのに対して、出水では堅果も石皿類もほとんど見られない。保存がきいて定住に有効な植物食の資料を欠くことは、出水貝塚の性格を占うものであろう。

古城泰によれば、アメリカのブラック・メサ遺跡

では、土器型式の継続年数は、200年～45年であるという。出土状況から見て縄文土器も似た数値になるものと思われる。出水貝塚で、貝塚出土の型式は出水式と市来式であるが、両型式が一部重複するとしても、出水式・市来式を用いた人々が住んでいた年月は、相当長期間に及んだものと思われる。所が確認調査では、貝塚の堆積期間は10年間という。全調査を通じて、住居跡の存在や、定住の痕跡は見当たらない。恐らく人口は少なく、遊動的な生活が繰り返されていたものであろう。終わりに、山内博士が発掘後のレジュメに、出水貝塚の重要な点は、人骨が初めて出たことと、下層の押型文土器が発見されたことであろう。と書かれた言で結ぶ。

資料の所在

出土遺物は、出水市教育委員会に保管されている。

参考文献

- 山崎五十磨1922「薩摩国出水貝塚」『考古学雑誌』十一巻五号
 京都帝国大学考古学研究室1923「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝国大学考古学研究報告』第六冊
 河口貞徳1958「出水貝塚」『鹿児島県文化財調査報告書』5
 出水市教育委員会2000「出水貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』11

(河口貞徳)